2010年9月20日発行

はたらく女性のフロア通信 第6号

「第11回全国女性史研究交流の集いｉｎ東京」

”女性史の未来をどう切り拓くか“

９月４・５日「つどい」が国立オリンピック記念青少年総合センターを会場にして開催。両日とも全国から集まった 500 人の参加者で、各地からの研究報告と熱心な討論が行われました。今回のテーマは〝新たな女性史の未来をどう切り拓くかでした。１日目は澤地久枝さんの記念講演「一人からはじまる」と６分科会での討論、交流・懇親会で、２日目は５分科会での討論とミニコンサート、全体会（１１分科会報告と総括討論・今後の課題）が行われ、「女性史資料の保存・公開に関するアピール」を採択し、第１２回のつどいへの継続を願って、心身ともに熱かった２日間が終わりました。私は１日目の第６分科会の司会を担当したので、どのような報告・討論がされたかを報告します。分科会は「労働・福祉」で、この分科会設定の意図は女性の非正規雇用の増大、貧困と格差が広がっている今日の状況から労働と福祉を一体としてとらえる必要があった、とのことでした。

報告は①「王子製紙争議の中の女性たち一主婦連と女性労働者」北海道・岸伸子さん（王子製紙争議を語りつぐ女性たちの会）が、１９５８年無期限スト、労働者の妻を組織した主婦連の歩みなどを報告し、②「竹中恵美子の女性労働研究と女性運動」大阪・伍賀偕子さん（関西女の労働問題研究会）が竹中の研究５０年の軌跡とその理論と運動の交流はどう紡がれたのかを、総評オルグとしての体験も交えて語り、③「貧困の女性化」では、元『女性ニューズ』編集長・関千枝子さんが、経済のグローバル化により貧困層に占める女性の比率が高くなっていること、それらが凝縮されて母子家庭に現れていることを指摘されました。討論の時間は諸事情から、ほとんど無かったのですが国や自治体での職員の非正規化の現状、東武労組の家族会の経験など貴重な意見・報告をいただきました。

女性の人権をメインストリームに！

助言者は米田佐代子さん（近現代史）でした。米田さんのコメントと私の感想をまとめますと、①労働組合が家族や主婦を組織するということをどう位置づけるか、男だけが闘う・やる、のではなく男も女も助け合っていくという考え方、その中での主婦である人たちの闘いの経験をどう活かすのか(米田氏)、②これまでの運動と研究の中から女性の賃金差別をなくし雇用の男女平等を実現していく方向としてディーセントワーク、労働の人間化一人間らしく働ける社会システムの実現を目指すことが求められていること、③三つの報告をジェンダーの視点で通してみると共通して見えてくるのは、〝女性の人権〟の問題です。それを労働運動・労働組合運動の中で、あるいは地域・社会運動の中で、人間的な生き方として獲得していくことをメインストリームにしていく、このことを確認し合えた分科会となったのでは、と思います。

本間　重子（会員）

■今、職場では　　池田資子（会員）

定年退職後、清掃の仕事をしています。もうすぐ２年になります。早起きには慣れましたが、いまだに仕事が終わるとぐったりします。私の労働条件は時給 1,000 円の日給月給制、身分は準社員、勤務時間平日 7 時～16 時、土曜 7 時～13 時半まで、通勤費支給、社会保険完備、定年 65 歳。仕事内容は事務所ビル内の掃き拭き、ごみ回収、水回り清掃、外周りの掃き等です。勤務場所によって時間や仕事内容は変わります。

今私の居る所はパート・アルバイトを含め 13 名で一つのビル全体の清掃をしています。兎も角、始業時間までにひととおり清掃を終えなくてはなりません。朝は戦場です。働き始めの頃は 10 時までに終わらず、休憩後残った部分を仕上げていました。他の人たちは別の仕事に入っている為、自分は落第だと思うこともしばしば。清掃の経験がなくても働けますが、「早く綺麗に」が求められます。また、慣れない肉体労働で、体のあちこちが痛くなります。私自身もこの間、腰痛、疲労骨折、手湿疹と様々なトラブルを経験しました。現在も腰のコルセットは欠かせません。

清掃の仕事は午前中 3 時間～4 時間のパート労働者が圧倒的に多く、パートの多くはダブルワークをしています。時給 1,000 円でフルに働いて、大卒新入社員の賃金に届きません。時給 1,000 円は都内で働く場合で、神奈川県内では 850 円～900 円出れば良い方でしょう。時間給に男女差はありません。トイレ清掃は主に女性が行います。女性は男性の仕事を代わって行うことができますが、男性はトイレ清掃をしません。全員揃って、朝の挨拶、10 時のお茶、昼食、終業挨拶等、少人数の職場では人間関係の問題は苦痛の種です。人としゃべるのが厭で清掃を選ぶという人がいます。作業中はひとりが多いので何とかなります。しかし、それ以外の時間はどうなのでしょうか？

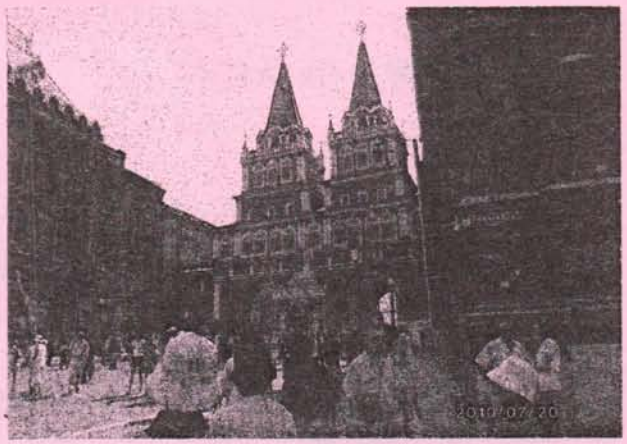
定年後の仕事探しも大変　事務職はないと同じ

私はハローワークで仕事を探しました。事務の仕事に何件も応募しましたが、ほとんど書類選考で駄目でした。面接に行っても、「年齢制限で拒否出来ないから」やっているという感じでした。定年後の仕事探しは思った以上に大変でした。専門の仕事か一般事務であれば経理・人事等の業務に精通していなければ正規で仕事を探すのは困難だと思いました。「年齢」という差別が確かにあると思いました。今の職場もハローワークの紹介です。面接だけでした。あっけなく決まり、驚きました。一応社員並みの扱いで、社保完備、年金不足を補うだけの賃金と定年組にはまあまあの条件です。

清掃の仕事はおじさん・おばさんばかりと思われているかもしれませんが、若い人も大勢働いています。不安定な派遣労働から転職した人、人づきあいが苦手という女性、学校に通いながらパートで働く若者。就職難の時代に清掃・介護・警備の仕事は常に人手不足です。会社側の経費節減で請負額は減る傾向にありますが、清掃は誰かがしなくてはなりません。「お掃除か」と毛嫌いせず飛び込んでみれば、面白い面もあります。まだまだ封建的で改善する点も色々。とりあえず第二の定年目指して続けて行くつもりです。

自由主義のロシア旅行

７月１９日より９日間でロシアに行ってきた。まず最初に驚いたことは、飛行場からモスクワへ向かう道が渋滞していたことだ。日本の渋滞よりひどい車の量。また、途中のいすゞやマツダの看板が目についた。次の日、赤の広場クレムリンへ、ソ連時代に共産党の党大会などが開催されたクレムリン大宮殿、現在はオペラやバレエの劇場として使われている。クレムリンとはロシア語で城砦だということをしった。



ロシア革命の指導者レーニンが眠るレーニン廟を横目にみながら聖ワシリー聖堂を見学した。翌日は少し離れたスーズタリーへ。村全体が教会と思うばかりの静かな村だ。草原に消えていく夕日はなんとも云えない感動的であった。サンクトペテルブルグで４日間を過ごした。サンクトペテルブルグはピョードル大帝がロシアの近代化に向けて１７０３年に建都した。ロマノフ朝が詠歌を見せる中、プーシキンやドストエフスキーなどの文化やバレエ、オペラなどの芸術も花開いた時代だ。女帝の隠れ家とされるエルミタージュはエカテリーナ２世の私的な美術館だと知りその優雅さや大きさに驚いた。今は世界遺産に登録されている。

私は今回の旅で、社会主義から彼らが言う自由主義の変わり、生活がどう変化したか知りたいと思ったが、若者も高齢者も余り多くを語らない。ガイドさんは私ぐらいの方で普段は学校の先生をしているとの事。ロシアには国立アパートが多くあり、これは社会主義の時代に作られたもので、家賃は安くソ連時代は水道光熱費ぐらいの金額と言う。だが現在は民間のアパートや分譲アパートが出来、家賃がだんだん高くなっている。また、医療費や教育費は無料だが、お金のかかる学校もあるという、なんだかよくわからない状態に思えた。エカテリーナなどの時代には農民などは虐げられ、農奴としてこき使われ、その上の反映だと思うとなんともやりきれない。また、社会主義から変わり、これからどうなって行くのか気になるが、若者たちは今の生活が良いといっていた。

村田　泰子（会員）

「韓国併合 100 年」雑感

私が「日本軍慰安婦」にこだわるようになったのは、東京で慰安婦裁判を傍聴してからでした。「何十年も過ぎた今も、PTSD に苦しみながら生きている」という訴えを聞いて、その大娘(ダーニャン)のことが忘れられなくなりました。女性だからこその「戦時性暴力被害者たち」の心が少しでも癒されるよう、人権を取り戻すことができるよう、力になりたいと思っています。韓国に関心を持ったのは「日本軍慰安婦」のこともありますが、やはり「冬ソナ」が直接の切っ掛けです。普段 TV を見ない私が、偶然、予告を見たのですか

ら運命でしょうか。きたがわてつさん達とソウルから慶州へ鉄道で移動したときに、窓外の景色を見て「あぁ、日本の田舎と同じだ」と感激したあの青い田んぼが目に浮かびます。

韓国併合100年」ということで100年前の日本と韓国の関係について、いろいろな文章や論説などを読んでみました。当時は平等な立場ではなかったことが明らかです。日韓併合当時外務省政務局長だった倉知鉄吉の回顧録で、侵略性を隠ぺいするために「併合」という造語を使ったことが書かれています。1909年7月6日、明治政府が「韓国併合」の具体的方針「適当ノ時期ニ併合ヲ断行スル」を閣議決定し、政治団体の解散、集会の禁止、新聞の廃刊など弾圧を強め、一年後にその日を迎えたのです。朝鮮日報ネットニュースは8月29日付で、日本と韓国の大学生20人が「新しい日韓関係のための共同歴史体験」に参加したことを報じています。事実を自分の目で見て学び確認することは、意図的に歴史を歪曲しようとする暴力に対抗する大きな力になります。相手の立場を理解し思いやるには、何よりも事実を知らなければなりません。

韓国や中国の歴史記念館などを見学して「二度と過ちを繰り返さない」という、人々（民族）の決意を感じました。「侵略されて主権を失い、さまざまな苦しみをもう二度と繰り返すことのないように」という、次世代へのメッセージです。「移住労働者と連帯する全国ネットワーク」が発行している5月の情報誌に、日本国籍取得時の人名用漢字の制約についての記事があります。韓国・朝鮮・中国・台湾で一般的に使われている崔、姜、趙、尹などの文字が常用漢字表、人名用漢字表にないため民族名を捨てて「より日本的な」姓名を使わざるを得ないというのです。この記事を読んで「創氏改名」のことを思い出しました。

法務省はテロ対策と称して、2007年11月20日から日本に入国するほぼ全ての外国人から指紋採取と顔写真撮影を実施しています。1980年代に在日韓国・朝鮮人の指紋押捺拒否運動があり、1993年に永住者、2000年に非永住者に対する指紋押捺が廃止されましたが、わずか7年で外国籍住民の指紋採取が復活してしまいました。また、韓国でも2010年から、入国するすべての外国人の指紋採取と顔写真の撮影を行う予定と云われていますが、実施されているのでしょうか。「いっそのこと国境がなくなればいいのに」と考えるのは私だけですか？　　紺野　貴美子（会員）

戦争体験を若い人に

アジア・太平洋戦争が終わってから今年で65年になります。今や、戦争を体験していない世代が国民の大多数を占めるようになり、戦争体験の「風化」が懸念されています。このような時期に、戦争体験世代が、その体験を若い世代へ語り継いでいくことは、憲法9条をまもり、日本の平和を守っていく上で、大変重要なことです。その想いで、県職員の退職者達でつくる「県職労連・退職者こだま会」が、会員23人の戦中体験記などを収めた『つたえたい想い　神奈川県職員の戦争体験を若い世代へ』を出版しました。過酷な戦争、空襲の被災、勤労動員といった苦難に加え、戦時下に県庁が担った暗い役割も知ることができます。２３人の戦中体験者と、県庁に働く若手組合員とこだま会役員の座談会、そして、戦時下の神奈川県庁を加えた三部作になっています。価格は送料込で６００円。連絡先は、神奈川県職員労連・退職者こだま会。電話０４５－２１２－３１７９。毎週火曜日ＡＭ１０：００～１６：００。松尾佐知子（会員）

◆ はたらく女性のフロア通信第6号
◆ 発行：はたらく女性のフロア
編集委員：池田資子・本間重子・渡辺泰子
◆ 発行日：2010年9月20日
◆ 連絡先：横浜市中区桜木町3－9　横浜平和と労働会館1階
℡・fax：045-263-8733